寒中念仏

宮本を歩く

「寒念仏」「寒中念仏」という言葉があります。1年でもっとも寒さの厳しい小寒から立春の前日までの30日間、鉦をたたき声高く念仏を唱えながら仏堂や家々を巡る行事とされます。

江戸時代、市内の真言宗寺院の念仏講では「寒念仏」、日蓮宗の寺での題目講では「寒行」などが行われていたと考えられますが、現在確認できるのは宮本村（匝瑳地区）だけです。熊野神社に面した台地麓の共同墓地入り口に、6体の地蔵菩薩の石像（六地蔵）がまつられ、台石部分に「巡行奉る寒中念仏」と刻まれています。

宮本には806年から810年の大同年間にまつられたと伝わる熊野神社があり、1353（文和2）年の銘文の梵鐘（釣り鐘・千葉県指定文化財）に見られるように、王子山光明院安立寺が神社を管理していました。

台石に刻まれた寒中念仏の文字

光明院は江戸時代、八日市場・見徳寺の門徒寺となったため、六地蔵の開眼導師などは見徳寺住職が勤めました。

「寒念仏」、「寒中念仏」と刻まれた六地蔵のうち、もっとも古い石像は、1732（享保17）年11月23日のもので宮本村「若衆」が中心となり造立しましたが、3年前にも「村中男女」が1体をまつっているので、この頃すでに村に念仏講があり、寒中念仏も盛んだったのでしょう。

熊野神社前道路の側にある1736（享保21）年正月に宮本村中でまつった庚申塔側面の文字から、寒中念仏が夜間にも行われ「寒中夜念仏の邑里」と刻まれた近隣の生尾、山桑、大浦、長岡、松山の各村も回ったのでしょう。六地蔵のうち4体に「寒念仏」、「寒中念仏」とあり、20年余りをかけ1755（宝暦5）年2月24日の造立で6体がそろいました。

六地蔵は寺院や墓地の入り口などにまつられ、故人が死後良い世界に生まれ変わることを願って建てられたとされます。

旧八日市場市域では14カ所で確認され、1650年代から1750年代にかけて造立されました。40年振りに訪ねた宮本の六地蔵はきれいに整備された墓地にまつられていました。

（市文化財審議会委員・依知川雅一）

問秘書課広報広聴班☎73・0080